

島根の中山間地から Work as Life

第10回

「フリースクールの1つ」

野中 浩一

1. 社会のセーフティネットとして(官民連携)

2017年に教育機会確保法が施行されてから6年が経った。私が島根県の松江市で運営するフリースクールも13年目となり、開校当初と比べて官民の連携が多少なりとも動いていることが感じられる。

2019年に通知された文部科学省の『不登校児童生徒への支援の在り方について』の文中には、「本人の希望を尊重した上で、場合によっては、教育支援センターや不登校特例校、ICTを活用した学習支援、フリースクール、中学校夜間学級での受入れなど、様々な関係機関等を活用し社会的自立への支援を行うこと」「その際、フリースクールなどの民間施設やNPO等と積極的に連携し、相互に協力・補完することの意義は大きいこと」が明記されている。

こうした施策に対応した、著者の周りの身近な動きがある。著者が運営するフリースクールにおいて、2020年より「島根県子ども・若者支援地域協議会」の民間団体として参加が認められ、多様な情報交換ができるようになった。また、代表である著者自身が2019年以降、県立の養護学校の「学校運営委員」として参画して運営会議に参加したり、養護学校の先生20名が視察に来られたり等の行き来が生じた。このことから、不登校の子どもも含めて児童・生徒1人1人が安心してより良い学校生活を送るための機会や環境の整備が進んでいるように感じている。

一方で、全国的にはまだまだ民間のフリースクールとの連携には二の足を踏むケースが多いように感じている。神奈川県や茨城県や京都府など積極的にフリースクールと連携する自治体がある一方で、全国的には連携が進みにくいのはなぜなのか。やや古いデータではあるが、2016年に文部科学省による自治体への調査結果では、連携に向けた課題として「学校復帰のための取り組みと相いれるか明確でない」、「連携の効果が明確でない」、「子供の個人情報の共有が難しい」といった点が挙げられている。もちろんこれも一因であるが、これまで12年以上に渡りフリースクールを運営してきた立場から見たときに、学

校の先生や自治体の職員が、「フリースクール自体を知らない」または「多少知ってはいるが、深く関わったことがないから、よく分からない」など、連携以前にそもそもフリースクールの存在や実態を「知らない」ことも連携が進まない一因であると感じている。

そこで、今回は主に高校生たちが通うフリースクールの1つを、写真や図表を中心に紹介したい。

2. 集いの場(写真、間取り、生徒数推移)

著者が運営するフリースクールは、15歳から20歳前後の生徒たちが、主に高校卒業資格を取得することを目的に通っている。学習だけでなく、対話、遊び、活動を集団で行う、通学型のフリースクールであり、連携する通信制高校の卒業資格が取得できる通信制高校キャンパスを兼ねている。

在籍する生徒30名強、過去の学校の経歴だけで言えば、長年にわたる不登校、別室登校、支援学級などの経緯をもつ子どもたちが混在している(もちろんそういう経緯をもたない子も含まれている)。医療にかかる子や何らかの診断が出ている子も少なくない一方で、訪れた教育関係者からは「こんな活気ある支援現場があると知らなかった」「こんな普通に元気な高校生たちとは思わなかった」との声があがる。いろいろなタイプの子たちが集団で共存する、教育とケアが並立している現場である。



※プライバシー保護のため、写真はすべて加工しています

建物、間取り、机の配置等については下の図1のとおりである。外観では2軒あるように見える両方もが活動スペースであり、日常的に通ってくる生徒18~20名と職員4~5名が一斉に活動できるように配置している。また、中央から全体が見渡せるよう、間仕切りを最小限にしている。最大で全生徒30~35名が集うこともあるが、その際は別の会館を借りて使用することもある。

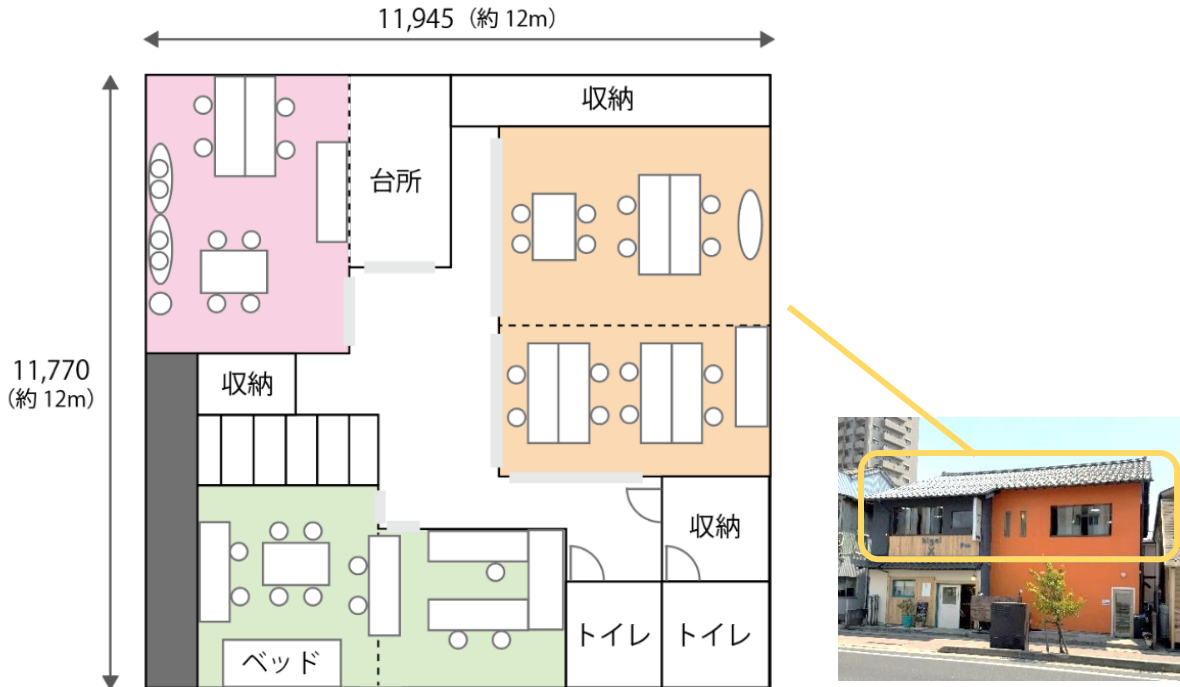


図1 間取り (2023年度時点)

当該フリースクールについて、見学・説明会においてよく聞かれる質問は下記のとおりである。

- ・ 何人くらい在籍して通っているのか
- ・ 辞める子もいるのか
- ・ 3年で卒業できるか、留年はあるか
- ・ 男女比はどのくらいか
- ・ 中学生も通えるのか

それぞれの「回答」は下記のとおりである。

- ・ 何人くらい在籍して通っているのか → 概ね30名強
- ・ 辞める子もいるのか → いる。年間で0~3名の間。ただし数年後に復帰した生徒も2名あり
- ・ 3年で卒業できるか、留年はあるか → できる。学内の留年は12年間の卒業生128名中5名
- ・ 男女比はどのくらいか → 12年間のうち11年間は概ね半々。近年は男子比率が多め(6割強)
- ・ 中学生も通えるのか → フリースクールコースで小・中学生、大学生も通うことがあるが、ごく少数

これまで12年間の生徒数は図2のとおりである。開校3年目以降は、30名強で推移している。基本的には希望があれば断らない方針でいるが、コロナ禍の一時期は断らざるをえない状況があった。

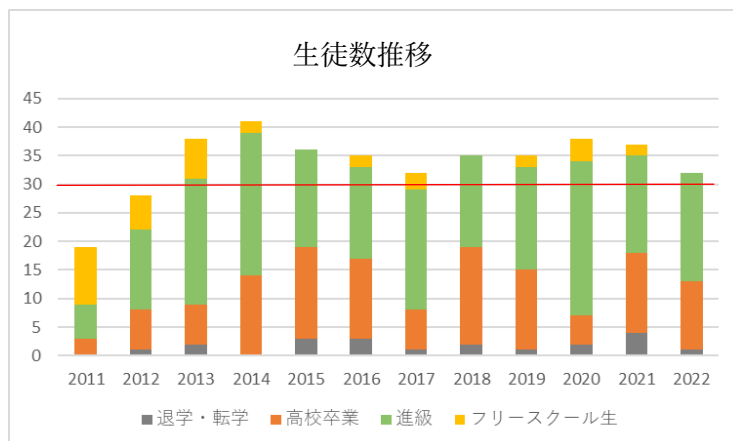


図2 12年間の生徒数推移 (2011年度～2022年度)

3. 学びの場 (諸活動、時間割り、家庭・保護者との関与)

このフリースクールでは、「対話」「遊び」「学習」「活動」を循環させながら、人間形成と学習の習得、そして将来の進路を模索する役割を担う。教育の方向性や集団形成はロジャーズのPCA (パーソン・センタード・アプローチ) を、循環構造についてはオランダのイエナプランを拠り所としている。諸活動の一例として、新入生が入学間もなくの3ヵ月間で行ったことを図3に記す。

2023年4～6月に行われたこと (生徒)				
	対話	遊び	学習	活動
日常的 (ほぼ毎日)	◎昼のひと言	◎休憩時間に集まってわいわい	◎レポート学習 ◎相互の教え合い	
定期 (頻度高～中)		・スタイルアップ腕立と腹筋を15回 (任意参加)	◎さかのぼり学習の英語講座 ◎地理・歴史講座 ◎理・数講座	◎そうじ
不定期	◎学園長より、起きていることや、感じていることの伝達 (随時) ・LINEでのやりとり (欠席、遅刻) ・直接の相談、ずれ感の翻訳・通訳 ・LINEでのやりとり (相談)	<頻度高> ・カードゲーム、ボードゲーム ・公園で軽運動 (キャッチボール、ドッチボール、卓球) <頻度中～低> ・料理、お菓子づくり ・イラスト描き ・ドライブ+海辺の散歩 ・楽器 (ギター、ドラム、ベース) ・手芸、工作 ・釣り ・ファッション、メイクの集い	<頻度高> ◎各科目の授業 (主要5教科) ◎各科目の授業 (保体、家庭、音楽、美術) <頻度中～低> ◎学習 (レポート、授業) 進行度チェック ◎進路のワークショップ ・大学散策、図書館利用	・バドミントン (部活動)
単発				◎山でのハイキング、BBQ ・ボランティア活動の計画、実行 ◎定住財団とのコラボ企画「10代に求められていること」対談 ◎浴衣の着付け講座

◎項目はその日に来ている生徒ほぼ全員が参加 (20名前後) ○項目は多くの生徒が参加 (10名前後～20名弱) ・項目は10名未満の少数または個人で行われている

図3 活動の具体例 (対話・遊び・学習・活動の循環)

学習については、在籍する生徒それぞれ経験・知識・能力にかなりの幅がある。高校の学習内容や大学受験に円滑に向かえる生徒がいる一方で、中には小数・分数の計算や This や That を読むことがおぼつかない生徒もいる。こうした様々な生徒たち、特に学習が苦手だったり発達に凸凹がある子たちが、自分ごととして学習に向かえること、支援されすぎて学びの主体性を見失っている状態から脱することを目指している。そのために当該フリースクールでは、やるべき学習課題および見通しを明確化し、1日の中でも個別学習と集団学習を横断しつつ、これまで教えられたり支援されていた側だった生徒が、教えたり支援したりする側にもまわる。折々の集会で各自の進捗を共有しながら、日々学習に取り組んでいる。

学校としての日常を過ごすうえで、当該フリースクールにおいても時間割りを定めている（一例として図4にて2023年度と2017年度の時間割りを提示）。この時間割りにについては、生徒の状況、集団としての様子により、年度ごとに大幅に変更を加えることも多い。

時間割り 2023年度						
	月	火	水	木	金	土
10:30 -12:50	フリー 英語講座	フリー 英語講座		フリー 地歴/記述講座	フリー 記述講座	
13:00 -15:20	活動	活動		活動	活動	
15:30 -17:50	フリー	フリー		フリー	フリー	

●上記の12枠の中から、「基本となる4枠」を定めます（月・木or火・金）

- 「基本4枠」の時間内に登校し、学習および活動を行うことで進級・卒業できます
- 「基本4枠」以外にも、「自由登校枠」として最大プラス4枠まで登校できます
- 自由登校枠について、その日の判断で登校してもらって構いません
- 自由登校枠は、行事等の事情により、事前に告知して登校調整する可能性があります
- 4月の年度初め2~3週間程度は、自由登校枠を0~2の間で調整いたします

平成29年度 時間割						
	月	火	水	木	金	土
9:00-10:00	待合時間(1F)	待合時間(1F)	待合時間(1F)	待合時間(1F)	待合時間(1F)	待合時間(1F)
10:00-11:40	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム	フリータイム
11:40-12:40	昼休み&掃除	昼休み&掃除	昼休み&掃除	昼休み&掃除	昼休み&掃除	昼休み&掃除
12:40-13:00	連絡と報告	連絡と報告	連絡と報告	連絡と報告	連絡と報告	連絡と報告
13:10-14:00	体育・外遊び	音楽 国語	数学(受)	美術 社会(地歴)	英語	家庭
14:10-15:00	体育・外遊び	音楽 国語	数学(さか)	美術 社会(公)	英語	家庭
15:00-16:00	Tea Time	Tea Time	理科 Tea Time	Tea Time	Tea Time	Tea Time
						卒業生の集い ・フワフワサロン (第4土曜日) ・夏祭りの会
◎週9日のコースは、月・水・金と火・木・土の2パターンの通い方 →前・後期で入れ替え →12時40分の「連絡と報告」までに登校することで出席（登下校時間は柔軟）						
◎週4~5日のコースは、月・水・金が必須、火・木・土から1~2日選択 →10時~15時00分までが登校時間（午後の授業参加も必須）						
※全クラスとも、登校曜日の『連絡と報告』の時間（12:40~13:00）は必ず出席する						

図4 フリースクール時間割り

開校して数年間は時間割りどおりに通える生徒ばかりではなく、午後から登校する生徒も半数近くにのぼり、通えない日がある生徒もいた。一方で、近年は9割以上の生徒が時間割りどおり午前中から通ってきている。この点は、場や集団の安全感の醸成、生徒間の集団としての関係構築、メールやLINEを活用したナッジなど、積み重ねてきた工夫が一定の効果を表しているものと考えられる。

当該フリースクールでは、家族に安心してもらい、笑い合える関係づくりを目指している。ご家庭が抱える荷物（負担や負荷、負の循環等）の一部をおろしてもらうことを目指して、定期的に家族と会う機会を設け、また不定期に連絡をしている。その目的は生徒の変化や家庭の変化を知るためであり、何か大事がある前に一緒に話し合える下地づくりをするためでもある。

2023年4～6月に行われたこと（保護者）				
	来校	電話	メール・LINE	文章
日常的				
定期	・保護者会（年2回） ・保護者面談（年2回）			・通信紙の文章交換（毎月）
不定期	・入学前の面談	・相談や質問の受付 ・新入生の家庭に近況連絡 ・何かの予兆を感じたとき	・疾病や災害による対応 ・相談や質問の受付	

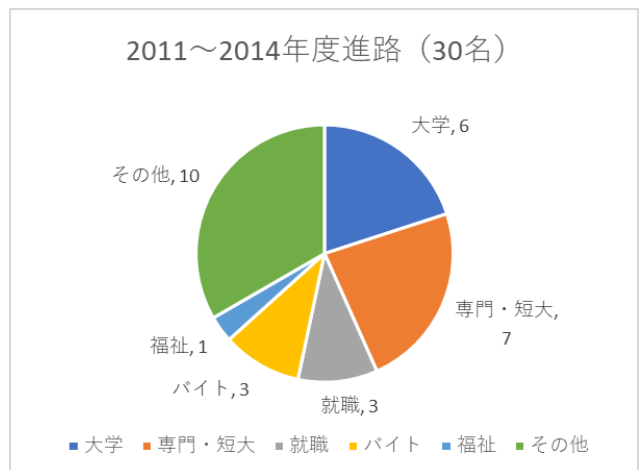
図5 家庭・保護者との関与

将来の架橋（進路）

卒業生がどのような進路を辿ったかは図6のとおりである。進路を4年ごと3期に区切ってみると、大学、専門・短大、就職といった一般的に「安定している」と思われる進路についての生徒の割合が「57%→74%→82%」と年を追うごとに次第に高まっていることが分かる。

著者が把握している範囲での進学・就職後の経過について、「四年制大学」に進学した卒業生は、そのほとんど（90%以上）が卒業に至っている。「短大・専門学校」に進学した卒業生では、約65%が卒業、約35%が途中で辞めて別の進路に進んでいる。「正社員として就職」した卒業生では3年以上続いている生徒が約60%であり、3年未満で辞める生徒が約40%である。

12年間の進路 128名	
大学（四年制）	22名
専門学校・短大	45名
就職（正社員）	25名
アルバイト	9名
福祉就労等	3名
その他	24名
※その他：浪人、職人修行、医療連携、手伝い・軽バイト等	



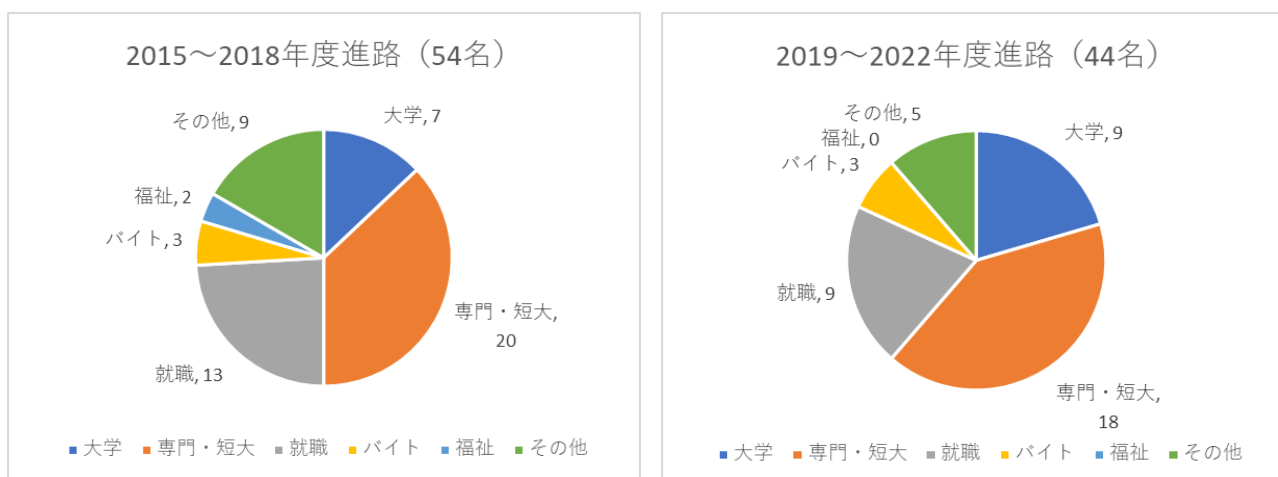


図6 卒業生の進路 (2011年度～2022年度)

フリースクールと経営

以上、ここまで提示してきた図1～6は支援機関として著者が運営するフリースクールの実態である。参考のため、経営体としてのフリースクールを下記の表1に記した。

設立年	2006年に母体の有限責任事業組合を発足、2011年にフリースクールを開校
創設者	野中 浩一
ミッション	理念：①ずっと相談できる場所、②せまく・ふかく関わる、③学校の機能＋家庭の機能補助 方針：いま目の前にある環境（自ら選択した環境）において、調和と妥協の中で折り合いをつけながら、学業や仕事、そこに含まれる人間関係を維持・継続させられる人材育成
事業規模	全体の事業収入は約2000万円（2013～2022年度の10年間の平均）
職員数	常勤4名・非常勤5名、講師6名・ボランティアスタッフ1名
拠点数と所在地	1か所 島根県松江市
在籍者数と居住エリア	32名 松江市および、近隣の出雲市、安来市から通学
開室日時	月・火・木・金の週4日開校 9時から18時まで 水・土は事務や行事等で不定期に開校
コース	高校卒業コース、フリースクールコース
費用	高校卒業コース サポート料金270,000円/年、月謝30,000円/月
その他費用	制服（購入任意）男子一式30,000円・女子一式38,000円 夏合宿（参加任意）10,000円前後、修学旅行（参加任意）90,000円前後 ※別途、通信制高校費用10,000円～270,000円程度（世帯収入による）
補助金	遠方通学補助20,000～40,000円/年、ひとり親補助40,000円/年、 学び奨励金80,000～100,000円/年
関連事業等	カウンセリング（心理オフィス）
その他	島根県子ども若者支援地域協議会員（2020年10月～）

表中の学費について、フリースクール費用と通信制高校費用を合わせた総額で年間 89 万円～46 万円に設定している。経済的に厳しい家庭については、就学支援金（給付）、県・市の補助金（給付等）、奨学金（貸与）を組み合わせた範囲内で通えるように、加えて独自の補助金制度を設けて学費の総額を年間 40 万円代後半から 50 万円代前半になるよう調整している。そのこともあり、これまで非課税世帯も含め様々な所得帯の家庭が通学・卒業してきた。中には生徒自身がアルバイトによって学費の全額、または半額程度を支払ったケースも数件ある。

おわりに(写真)

ある 1 つのフリースクールについて、図表をもとに実態を述べてきた。多数ある民間のフリースクールは、経営者や運営体制がそれぞれまったく違うため、多種多様で玉石混交である。しかしどの場所であっても、集う子どもたちに笑顔があり、継続して対話や遊びや学習に取り組むことができているのであれば、いい場所と言えるのではないだろうか。最後に、集団で活動することを基本とする通学型のフリースクールでの活動の様子を再度提示したい。



※プライバシー保護のため、写真はすべて加工しています

引用・参考文献

文部科学省（2019年10月25日）「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1422155.htm

日本経済新聞（2016年7月5日）「フリースクールがある自治体、5割超『連携なし』」

<https://www.nikkei.com/article/DGXLZO04500550V00C16A7CR8000/>